

岩手県東日本大震災津波復興委員会
総合企画専門委員会現地調査議事録

(日 時) 平成 30 年 6 月 1 日 (金)

(調査先) 釜石市、大槌町

釜石市・釜石ヒカリフーズ (株)

代表取締役 佐藤正一氏

釜石市・釜石港湾口防波堤

国土交通省東北地方整備局釜石港湾事務所

釜石市・ガントリークレーン

岩手県沿岸広域振興局土木部河川港湾課

釜石市・釜石市役所

釜石市総務企画部震災検証室

大槌町・大槌駅

大槌町総合政策部総合政策課

大槌町・(株)ゼネラル・オイスター大槌センター

代表取締役社長 吉田琇則氏

委員

齋藤徳美 谷藤邦基 豊島正幸 中村一郎 平山健一 若林治男

<釜石市・釜石ヒカリフーズ (株) >

○佐々木復興推進課総括課長 それでは、総合企画専門委員会を開催させていただきます。
最初に、当委員会の齋藤徳美委員長より御挨拶申し上げます。

○齋藤徳美委員長 今回は委員会形式ではなく、現地調査ということで、我々次の復興に
様々な御意見を出させていただくために、現地の生の状況、そして今何が課題で、どのよ
うなことをしてほしいかという御要望を積極的に承って、提言して検討して動いていく趣
旨でございますので、立派な成果よりも、このような困難があり、何かできないかという
率直なお話を承りたいので、どうぞよろしくお願ひしたいと思います。

○佐々木復興推進課総括課長 それでは、ヒカリフーズの佐藤社長様、どうぞよろしくお
願ひいたします。

○佐藤正一代表取締役 まずは、本日大変足元が悪い中、お忙しい中、弊社を御訪問いた
だきまして、心より本当に感謝申し上げます。本日は、短時間でございますが、どうぞよ
ろしくお願ひいたします。

時間もないので、まず冒頭、私どもの立ち上がりというところを少しお話しさせていた
だきたいと思ひます。弊社は、2011年3月11日の震災の後の2011年8月には会社を設立
しました。目的は3つです。1つは被災者の正規雇用です。現在は有効求人倍率が釜石で
も1.8以上ありますが、当時は働く場所がないというお声が多数ありましたので、これを
第一に考えました。その手段として、唐丹地区での水産業の復興を2つ目に挙げました。
そして、3つ目は、過疎化が始まっておりますので、若者の育成ということで、この3つ

を柱に設立いたしました。

その当時は、第1次補正予算の中でグループ補助金がありましたので、私も実はそれを目指しておりました。しかし、新規事業は該当外ということで、いただけませんでした。ただ、目的は復興のためですので、いわゆる企業を起こすための資本の3要素、人、物、金がどうしても必要だったので、日本政策金融公庫さんに相談し、結果的には一部補助金をいただくという形でスタートできました。

補助金については、2012年3月に釜石市の企業立地協定を結ばせていただき、設備投資基金の2割を補助金としていただけましたので、ある程度しっかりとした設備ができました。ただ、やはり予算的に足りなかったもので、2012年に三菱総研に応募して、カタールから1億円を供与していただくこととなり、排水設備や加工設備を作ることができ、非常に助かりました。現在は、経産省の予算で、新規事業も50%の補助金が出ますが、それを待っていたのでは遅く、やはり我々は復興のために立ち上がったということで頑張りましたが、お金の面では申し上げたように結構苦労いたしました。

また、人材登用についてですが、2011年8月、登記上、会社は設立しましたが、この工場ができたのは、ちょうど1年後の2012年7月25日、スタート時点では、約15人を採用させていただきました。現在は28名で、平均年齢34歳、これは多分沿岸でも一番若いと思います。採用の工夫として、フレックスタイムを導入しています。人によっては、10時から15時、9時から12時というパターンなど、実際に既に受け入れています。子育て世代にフレキシブルに対応していることが評価され、若いお母さん方も釜石市内からも来てくださいます。また、遠くは山田町、大槌町からも通っています。従業員は28名おりますが、毎日平均で3名は休みます。基本的に3人は休むものとして、工場稼働を行いますので、みんなでお互いさまという気持ちを大切にしながら働いております。このような子育て世代に優しいフレックスタイムの導入は、市からも応援していただいています。

また、工場を稼働して丸6年になりますが、若手育成ということで、地元の高校生が4期続けて入っています。また、彼らの友達も入ってくれるなど、少しずつ広がりが出てきています。また、ひきこもりの方を受け入れ、2年間工場で、親元から離れて頑張って働いているうちに、親御さんと関係が改善して戻っていったこともありました。また特別支援学校の生徒さんを雇わせていただくなど、開かれた地域産業振興を担うための水産加工場という立ち位置でおります。

このような取組を行っていたところ、日立製作所さんと御縁がありまして、2013年4月から支援していただいております。日立ソリューションズCSR部門の部長さんと最初にお会いした際に、私はヒカリフーズや水産業の話せず、まず人口1,800人の唐丹町という漁村を活性させたいということをして2時間以上話したところ、部長さんから本当に地域のことを考えて熱い想いを持って行動していると言われ、支援が決まりました。

日立さんの支援をしていただき4年目の2016年に、日立ソリューションズのCSR活動で行っている漁村の復興再生が日立製作所さんのCSR部門賞を取ったのです。このような活動が評価され、2016年8月には日立製作所さんと釜石市役所さんが地方創生協定を結んでいただきました。その橋渡しをさせていただいたことで、お世話になっていた方々に少し恩返しができるかなと思います。日立製作所さんは、350万人都市の横浜市としか結んでいない同じ契約を、この人口約3万人の地方都市と結んでいただきました。これは、

少しは地域のために役立ったかなと思ひ、今でもこの支援は継続的に続いています。

震災から7年が経過して、上場会社のCSR活動の継続はほとんどない中で、日立さんに入っただき、例えば小学校関連や、ワールドカップ関連など、様々ありますが、まず取り組んだのは地元の漁協さんのホームページの作成です。そしてシステム補修です。さらにNPOと連携し、中小企業向け、水産加工向け業務管理システムを作成していただいています。そのうえ、会社ロゴも作っていただきました。

それから、現在、会社パンフレットも無償で作成していただいています。また、日立さんの中に技術士会がありまして、様々な分野の技術士の方々が市役所の要望にどのように応えられるかということで、年10回程度お越しいただき、市役所の方々と我々と話をしながら、CSR活動に取り組んでいただき、今も継続しております。

日立さんが、継続してこれからも市役所や地域のために活動してもらえることは本当に嬉しい限りです。

国の支援は残念ながら当初はありませんでしたが、その後2つの事業を行わせていただきました。1つは文部科学省の外郭団体の科学技術振興機構さんにお世話になりまして、高知工科大学の技術を使って、三陸の魚の鮮度保持の研究をしたということで、産学官の連携をさせていただきました。サンマを一例に挙げますと、サンマが朝揚げり、スラリーアイスという鮮度保持の氷につけ込み、獲れた日の午後に発送すると、漁獲翌々日の到着時から7日目までの約4日間お刺身で食べられるということで、日航ホテルさんや阪急ホテルさんで実証済です。鮮度が格段に違うということで、高知ではあまりサンマを刺身で食べる風習がなかったようですが、美味しいと大変御好評で、喜んでいただけているとのごとでございます。

この産学官連携はNHKの「おはよう日本」でも去年取り上げていただきました。通常、予算が切れると産学連携はそこで終わってしまうことが多いですが、我々の連携は人的交流が続いていまして、現在も高知工科大学さんと一緒にやらせていただいています。そのため、年に1、2回は自費で高知まで行き、様々な活動をさせていただいています。せっかく税金でいただいたチャンスですから、継続して生かすというのは非常に重要なことかなという認識が強いので、人的交流としてさせていただいております。

2つ目は農林水産省のサバの畜養に取り組んでおりますこれは山口県にある農林水産業直轄の水産大学校さんが主体になり、東京海洋大学さん、岩手大学水産学部のサテライトさんと連携し、地元の泉澤水産さんと釜石湾漁協さんとでサバの畜養の研究をしています。

岩手県は御存知のとおり餌を与える養殖は禁止されています。ワカメやホタテ、牡蠣は養殖していますが、環境保全のため魚系の養殖はできないのです。我々が取り組んでいるサバの畜養は、定置網で獲れた生きたサバを生かしながら陸上の生簀に入れる陸上養殖、さらに釜石湾漁協さんの一部にフェンスを張って、そこに入れてあります。鮮度を生かしたままということで、オーダーがあると、脱血して鮮度のいい状態で、先ほどのスラリーアイスに入れて出荷します。東北で有名なサバは金華サバですが、岩手県ではサバを生で食べられる取組がないので、非常に価値が上がります。そうして漁業者の収入増加につながればと思っております。例えばサバは市場に上がると、安いときで3匹50円で取引されます。そのサバが1匹、仮に500円で売れば、やはりブランド化につながるし、漁師の方々の収入も上がるという考え方で、取り組んでいます。

実は、これも予算が去年切れました。予算は切れましたが、先ほどのとおり、継続することが私の使命ですので、ヒカリフーズ単体の予算で泉澤水産さんと、釜石湾漁協さんと岩手大学さんと継続した取組を続けております。このように様々な外部の方々との取組をさせていただいております。

最近では、農林水産省さんがプラットフォームを設置してくださり、各エリアで、様々な業態が集積になって1つの目的を完遂することとなりました。そのため、サバの蓄養とは別に、養殖に関するプラットフォームを水産関係、IT関係、ゼネコン、岩手大学さんの方々と立ち上げました。

岩手大学の水産学部の学生が13人、今年の後期に来るということで、今後、この研究設備の少ない釜石でどのように研究していただくかについて、現在取り組んでいます。目的は養殖ですが、養殖の中でもやはり知的財産の集約を目指しており、IT、AI分野等の実働養殖部隊と、流通マーケット等の部隊など、様々な分科会に分けようと思っています。その座長をさせていただいていますが、その中で各分科会が必要な資金を農水省さんに来年申請して、できれば岩手大学のサテライトさんに養殖研究施設を寄贈しようという壮大な計画で今動いております。

ヒカリフーズの仕事の話に戻りますと、6年経過しましたが、東証一部上場企業さん5社と直接取引させていただいております。3,000店舗ある大手居酒屋チェーンでは、そのうちの300~500店舗で、グランドメニューで私どもの商品が流れています。

また、別企業さんですが、イカ刺しは530円、シメサバは480円です。これについては、全国同じメニューで並んでいます。

さらに、生協関係も北海道から九州までほぼ網羅しており、岩手県、宮城県はもちろん、神戸や横浜生協、コープネットさん、パルシステムさんとも取引させていただいております。四国や九州に、ここでとれたワカメやイカ刺し、釜石ブランドをうたっていますので、広範囲にわたって三陸の魚種あるいは海藻を提供させていただいております。

最近では、遠野からアメリカへ月に1回1コンテナを輸出している企業さんと協力し、三陸の水産物を海外に持っていくという取組もスタートできるかと思っています。水産物を通じて広範囲にわたって地域経済、産業振興、本当に微力ですが、少しずつ輪を広げることで、人とのつながりができるので、大切にしたいと思っています。そのつながりの深さと連携で成り立っているのも、私1人の力では、とてもとてもできませんけれども、いただいた御縁を大切にしながら、地元のために何ができるかを常に考えながら頑張っています。

うちの会社には高卒生も就職するので、水産業は賃金カーブが少ない業種ではありますが、やっぱり先が見える職にしてあげたいです。この地域では20歳で結婚して、20代前半で子供数人ということもよくあります。若くして結婚するときには将来が見える賃金カーブを提示していくことも課題かなと思っています。

当初設立するときには、国からの補助金が本当に欲しくてたまらなかつたのですが、現行の経済産業省の補助金を待っていたら、多分ここまで人の広がりはつながらなかつたと思います。この何とかしたいという思いが、カタールであり、日立さんであり、文部科学省さんであり、農林水産省さんに、岩手大学さんも含めて響いていってくれたと思っていますし、やはり税金は大切なので、それを大切に使いながら、役立てるよという思いが強

くございます。それでは、現場へ御案内いたしますので、御準備をお願いします。

現場では、音楽が流れています。この辺りの水産加工会社でBGMを流している所はうちだけです。これは、当初プレハブの仮設に住んでいる方々が半数以上いたので、音楽を聞きながら少し気持ちを楽にしてほしいという思いが今でも続いています。BGMは最新ポップス演歌まで幅広い年齢層に対応しています。では、よろしくお願いします。



【質疑応答・工場見学】

○平山健一委員 スラリーアイスは、まだ改良の余地がありますか。

○佐藤正一代表取締役 いいえ。スラリーアイスは、特許も取っていますので、改良の余地はありませんが、魚種によってやっぱり違いがあります。濃度や水分を変える等のテクニックが必要になります。この技術はオープンにしようと思っています。我々独自の技術ではなくて、やっぱり使い方をオープンにして、さらなる発展に貢献したいと思っています。

高知工科大学ではカツオで行いノウハウを蓄積しています。そういったものを三陸の魚で研究していただいています。ドンコという魚がありますが、ブランド化を考えておりました、腐りやすいので、鮮度保持が必要なものは有益ですし、鮮魚で、生のお魚を出すというのも一つなのですけれども、市場で上がったもの、とれたものを、スラリーアイスとか鮮度保持して加工品にするということも大事なのです。水揚げされて放っておくと腐りますよね。ですから、水揚げされた状態で鮮度保持をしつつ処理するということは、鮮度がいい状態の中で加工品になるというふうな取組です。

2つの使い方があります、スラリーアイスは。原魚の鮮度保持をしながら、加工品でも鮮度のいい状態のものをつくと、それからもう一つは、鮮魚出荷でいいものをつくるという2つの使い方があります。

○豊島正幸委員 この頃イカが不漁と聞いていますが、原料調達の面は大丈夫ですか。

○佐藤正一代表取締役 原料調達は、この辺だけでなく八戸や久慈からも行っています。例えば原料のイカは、震災前は1kgあたり160円、4年前ですと300円。一昨年は900円まで上がりましたので、4倍近くになっているという、大変なことが起きています。さらにサケも獲れない。

○豊島正幸委員 受注に生産が追いつかない状況のようですが、そこまで評価されているのは、魚の鮮度もあるが、お話をうかがいましたら、これまでの取組そのもの自体が皆さんから評価していただいていると感じました。

○佐藤正一代表取締役 そうですね。上場会社の様々な取引形態がありましたが、うちは震災復興に何か役に立ちたいという企業ですから。いわて産業振興センターのファンドを使ってものづくりをしていますから、幕張メッセ等に行ってスーパーマーケット・トレードショーに3、4年出ています。そういった場で大手さんにお越しいただき、目をつけていただいて、震災復興とは別に物もいいねということの評価されていると感じています。

実は、これも流通の問題がありまして、一般的に我々加工メーカーがつくったものは、大手食品会社を通してわたります。そうすると3割程度のマージンが発生しますので、産地直送にしまえば、多少海外産よりは高いですが、それでも対抗できる価格帯になります。また国産ということで、安心、安全等の付加価値が出ます。そのため、量や物流、規格、安心、安全の面での品質管理が必要不可欠ですので、きちんとして行っています。

3年前から大手企業さんが、九州産のヤリイカをここまで運ぶのです。わざわざここでイカをさばいて刺身用にして、関東にもう一回戻します。それは、やはり信用を得ているということだと感じています。

また品質管理という点においては、トヨタカイゼン方式で岩手県さんにお世話になっています。ラインの変更は本当に大きな成果となりました。我々は従前のやり方を踏襲して

いますが、やはり無理があるということが分かり、感謝しています。

HACCPは、まだこれから取ろうとしています。現在もHACCPやISOに準じる形で管理していますが、国内であれば持っていなくても大丈夫ですが、海外進出となると必要不可欠になりますので。

しかし、7年前を振り返ると、ここまで人との御縁がつながって様々なことができるということは、想像もできなかったですね。日本政策金融公庫さんが融資してくれなければ、多分プレハブでもっと小さくやらざるを得なかったと思います。

これからの計画としては、養殖設備です。そして、観光、飲食。飲食業については、釜石市役所で行っておりますが、魚市場の横ににぎわい市場ができました。そこに、飲食店を出店しようと。あと観光という分野でも貢献できればと思っております。

○若林治男委員 先ほど御説明のあった蓄養ですが、餌をやらずに、どれくらい持つのでしょうか。

○佐藤正一代表取締役 大体2週間もちます。2週間から3週間はもちます。そのため、ビジネス的にはオーダーがあって出すというのが普通ですけれども、オーダーがなければ脱血してスラリーにつけ込んで工場に搬入して、鮮度保持した状況での高鮮度の刺身原料として使っています。アニサキスの問題がありまして、サバは必ずアニサキスがいるので、マイナス18度で48時間凍らせてアニサキスを殺して出荷しています。

○佐々木復興推進課総括課長 では、交替のお時間ですので、B班の方、よろしく願います。

○齋藤徳美委員長 ここでずっと水産加工業を営んでいた方や、今までの経験や、持っていた知恵、色んなものがあって、新しい発想のものができているわけですね。人脈、知恵、色々なセンスがあると、水産加工業のこのような新しい展開ができると思いますが、それを従来から水産加工業をやっている年配の方に求めても、なかなか難しいという問題が現実的にありますよね。

○佐藤正一代表取締役 そうなのです。そこが一番の問題点です。各担当さん、漁協さんも、高齢化が進んでいることもあり、これからは新しい取組、チャレンジをしていかないといけません。

○齋藤徳美委員長 社長が知恵をつけて、体験を若い人に語って、一緒にやっという動きもできると思います。しかし、希望の持てるものにならないと、若い人は飛び込んできませんからね。

○佐藤正一代表取締役 そうですね。さんりく未来創造塾があり、呼ばれて1時間程度お話をさせていただきました。

○齋藤徳美委員長 今会社を持っている年配の方は新たな展開をしにくいし、ただ新たな展開をしないと若い人も来ないという、ジレンマがあちこちあるように私は思っていて、積極的にこういう成功事例を示していきたいと思います。もちろん成功したかどうかは先に考える話だとは思いますが。決してパソコンで株取引するような新しい産業ではなく、漁業、水産加工業といったなりわいの再生で、ここまで行えるという希望を作り出していかなければならない。そういったものが各地域、集落に出てきてほしいですね。私は、よく金平糖の角と例えています。何とか金平糖の角をそれぞれ各集落に立ち上げる努力をし、またそういうものがたくさんあれば、様々なところに発展させられる可能性が出てきます。

簡単ではないけれども、県として、この三陸地域が将来的に、復興だけでなく、新しい再生、創生ができる未来像、一つのビジョンを示してほしい。そのために、社長さんのこのような動きは、一つ具体的な事例として示すことができます。

○佐藤正一代表取締役 おっしゃっていただいた金平糖の角になりたいと思っています。私が行っていることがきっかけとなって波及していけば、岩手県や日本全国に同じような影響があればと思っています。

○齋藤徳美委員長 首都圏一極集中の状態では、もう持たないと思います。例えば、電気は地方で作っている。地方が生きなければ首都圏は成り立たないし、首都圏が成り立たなければ日本も成り立たなくなる。私は、国に対して、地方もきちんと育成するような政策をどうしてとれないのかということに、いつも腹立たしく思っている。

○佐藤正一代表取締役 本当に先生がおっしゃるように、できれば国の方にも現場を歩いていただきたいと思っています。現場を歩けば答えが見えてくるのではないかと考えております。

○齋藤徳美委員長 私は、三陸を創生するという点に関して、沿岸 12 市町村が今は皆バラバラになっていると思いますので、知事や復興局が中心となって、一つの方向性を決め、皆でスクラムを組むような体制を作っていかなければいけないという思いがあります。

○佐藤正一代表取締役 私も水産加工業に限らず、様々な分野の方と協力体制を組ませていただいています。

○齋藤徳美委員長 それはお互いにこの地域で、自分で泥かぶって動いてきた方同士だから組めるわけですよ。才覚も努力もしている方であれば、異業種で組めるし、それが岩手のなりわいの大きなまとまりになってくると考えています。県がそれを積極的に推進し、お金を出さなくても、事例紹介等のフォロー、困ったことは国に伝える、銀行にも伝える等を実行してほしいと思います。ですので、社長さんから、県に対して行ってほしいということがあれば、おっしゃっていただきたい。

○佐藤正一代表取締役 環境の問題で難しいとは思いますが、漁獲高が減少していく中で、環境を守りつつ、養殖等、地元の漁村の人たちが、楽しいものを作り上げることができるかという点に関しては、研究していただければと思います。

○齋藤徳美委員長 岩手大学も水産学部がありませんでした。震災とともに、釜石サテライトを始めましたが、その分、結局既存のものも減らさなければならぬし、今後の新設はなかなか難しいと思います。しかし、せっかくサテライトを作ったので、ここをベースに、新たな研究ができる環境を整えてほしいと思います。

○佐藤正一代表取締役 北里大学の水産学部さんも撤退しましたが、今年からは自費で海洋生命科学部と提携しています。

○齋藤徳美委員長 結局それは、ある面で意欲ある人が自分で泥かぶって動かなければならないということになる。でもそれは個人の意欲に基づいて行う話ではないわけですよ。だから、行政や大学が積極的に旗振って、賛同いただいて、入っていただくシステムにしないといけないと思います。

○佐藤正一代表取締役 去年慶応大学総合政策部さんが来て、二、三回やり取りをする中で、釜石市役所と協定を結ぶことになりました。大学院生が釜石市に来て 2 年間実働すると、院の単位が取得できるというシステムも去年できました。いわゆる人事交流は、釜石

が提唱している人口交流の増加と同じかなと思いました。

○**谷藤邦基委員** 先ほどお話があった餌を与える養殖が禁止されているのは、岩手県だけの話でしょうか。それとも全国的なものでしょうか。

○**佐藤正一代表取締役** 西日本ではクルマエビなど餌を与えている養殖も行っています。

○**齋藤徳美委員長** 様々な政策があるので、全国统一で禁止というのは難しいかもしれない。でも逆に餌を与えて汚染させない対策についても、手法の工夫や勉強等で改善の余地は出てくると思います。工夫をすれば、課題があっても解決する術があって進展すると思います。しかし、さっきの氷点下のスラリーアイスの装置はすごいですね。

○**佐藤正一代表取締役** 微力ながら、様々な活動をしました。皆様今後とも引き続きよろしく申し上げます。今日は本当にありがとうございました。

○**齋藤徳美委員長** 勉強になりました。我々も機会があるたびに紹介していきたいと思えますし、県には課題について調べて対応していただくようお願いしたい。こういった活動を地域ごとに紹介して支援する。沿岸 12 市町村全てが、地域のビジョンとして具体的に作り出していく方向の話は是非打ち出したいと思えます。金平糖の角をあちこちに置きたいということが私の主張ですので、社長にも金平糖の角になりたいとおっしゃっていただけて大変ありがたい。

○**佐藤正一代表取締役** 本当にそうなりたいと思っています。本日は誠にありがとうございました。



<釜石市・ガントリークレーン>

○伊藤裕裁釜石港湾事務所副所長 釜石港湾事務所の副所長をしております伊藤と申します。よろしくお願ひします。

では、須賀地区からスタートします。真つすぐ湾口防波堤に向かひていきます。湾口防波堤に上り、北側に行ひて、また戻ひてきますけれども、大体約4kmあります。

この辺りが須賀地区の埠頭で、ここにガントリークレーンがあります。それでは岩手県さんからクレーンについての説明を行ひていただきます。よろしくお願ひいたします。

○藤井幸満沿岸広域振興局土木部長 沿岸広域振興局土木部の藤井と申します。ガントリークレーンの御説明をさせていただきますので、よろしくお願ひします。

お手元に資料をお渡ししてありますが、釜石港三陸復興パンフレットのコンテナヤード内施設概要を御覧ください。-11m岸壁にガントリークレーンが設置されております。これが18,000t級の船が着岸できる岸壁でございます、コンテナヤードとしては約6万㎡あり、コンテナを約1,000個保管できる施設でございます。

隣のジブクレーンは、以前から設置してあったものですが、今はこれを予備として使ひています。ガントリークレーンは、大阪府さんから寄贈いただいたものでござひまして、物としては無料でいただきましたが、運搬費と整備費を含めまして、約4億円の県負担で設置されております。基礎部分も、結構固めておりまして、下に鋼管杭を打ひており、その上にレールを設置してあります。ガントリークレーンを新設で購入すると、約10億円ですので、約6億円を大阪府さんから頂ひたことになりまひす。

高さはブームを上げた際に77mあります。腕を下げた状態で、上の三角形の部分までで56m、それから腕のところでは高さが32mでございます。船が着岸して約36mの高さまでコンテナを積み上げることができまひす。このコンテナは、平成29年8月13日に大阪堺泉北港を出港し、船でそのまま持ち込みましたので、8月17日まで4日かけて到着してあります。今の釜石港のコンテナの貨物量が平成29年度で3,724TEUということで、20フィートコンテナに換算して3,724個分取り扱ひしているという状況です。

東北横断自動車道の釜石秋田線が平成30年度全線開通予定ということで、これが完成すると花巻ジャンクションから釜石ジャンクションまでを25分短縮するので、釜石としても大きな物流の変化を及ぼすのではないかと考えてあります。

外貿コンテナにつきまひしては、南星海運という海運業者が入ひており、スターエクスプレスという船が来ひてあります。約9,520tの船ですけれども、20フィートコンテナに換算して約1,000本運べる船です。これが毎週金曜日入ひてきまして、釜石港を出て仙台港、釜山、上海などに直接コンテナを出しているという状況です。

コンテナの取り扱ひにつきまひしては、今現在1位の品目が自動車のワイヤーハーネスという部品が1位です。次が北米、カナダから牧草を持ひてきてあります。そして3位が冷凍冷蔵品、冷凍の魚を外国に輸出しているという状況です。ガントリークレーンの説明は以上です。

○伊藤裕裁釜石港湾事務所副所長 釜石の湾口防波堤ですが、震災前の平成20年に完成しました。昭和53年から約30年かけ、北堤990m、南堤670m、航路部分300mの全長約2,000mの防波堤。防波堤の機能として、物流を支える機能、港内に静穏な水域を作り、船舶の避難機能、そして津波防御と、大きく3つの機能を持ひています。

これは、東日本大震災の際に津波で浸水したエリアを示したもので、釜石港湾事務所にも一般市民の方も避難されましたが、1階部分は浸水しました。

震災以降、大量の瓦礫を撤去し、3月16日に清龍丸で緊急物資を運んでおりました。しかし約1カ月後には、新日鐵さんが物流を再開しました。防波堤の復旧事業は平成24年2月頃から着手し、平成30年3月まで約6年1カ月で完成しました。もともと30年かけて造ったものですが、南堤が670mのうち約300mが残り、北堤は120mが残っただけでなく、土台はほぼ残っていたので、今回は短期間での完成となりました。

防波堤の津波防御機能として、津波が防波堤を越えて陸域の部分を超える時間を約6分間遅らせることができました。逃げる時間は1、2分でも、とても貴重な時間だと思いますので、計算上効果がありました。

そもそも津波防護は、防波堤と陸上の防潮堤など、多重防護となっていて、防波堤自体はもともとの高さに復旧させています。防潮堤部分は、一部もとより高くして防護しました。

今回復旧するに当たって、もともとの形に戻していますが、設計上は明治三陸の津波に対する防護で計算されています。今回の東日本大震災の津波は明治三陸津波以上のものでしたので、それに対して絶対的にもつようには造ってはいませんが、粘り強く耐えるために、生き残っているケーソンの港内側の腹付け石（盛り石）や新設のケーソン底盤にアスファルトマットを敷くなどの工夫を行い、復旧させています。最終函のケーソンを平成29年11月末に据えまして、30年度末にようやく完成させることができました。説明は以上となりますので、防波堤に上陸をお願いいたします。



<釜石市・釜石港湾口防波堤>

○伊藤裕裁釜石港湾事務所副所長 これがもともとの断面で、今回作成した断面がこちらです。もともとの防波堤は30年かけて海底から建設を行ったため、30年かけていますが、今回は基礎となる土台部分がだいぶ残っていましたが、ここのマウンドを構築するのと、先ほど説明したケーソンを同時並行で作業することによって、全体の工期を短縮することができました。ケーソン製作には時間がかかります。震災前は、大きいものだと12段に分けてケーソンを打ちましたが、今回は8段でした。途中まで船の上で造っておろして、継ぎ足して、移動させて、継ぎ足しての繰り返しとなるので、時間はかかります。ケーソン自体は7,000~8,000tになります。

南堤の特徴は、今回復旧するに当たり、鉄構造の表面にコンクリートを巻いたハイブリッドケーソンを採用しています。岩手県ではこれを製作できないため、千葉、名古屋、三重等で造り、船に乗せて運んできて据えました。ハイブリッドケーソンは、普通のケーソンに比べて長いものを造れるため、こちらでは通常の約倍の50m等の長大なものを造ることが可能です。全体の工期短縮のためにこのような方法で行いました。

基礎となる土台部分の石材も地元ではなかなか手に入らないので、北海道から四国あたりまでで石材の調達をしました。他県の力をいただかないと、なかなかこの期間で復旧することはできなかったという状況でした。説明概略は以上です。

○齋藤徳美委員長 総工費はいくらぐらいかかりましたでしょうか。

○伊藤裕裁釜石港湾事務所副所長 復旧事業として約650億円かかっています。しかし、もともとの防波堤を完成させるために約1,200億円かかっています。震災以降様々な事業を行おうとした場合、資材も人件費も上がります。

○齋藤徳美委員長 これで完全に竣工ですね。

○伊藤裕裁釜石港湾事務所副所長 はい。防波堤は竣工しておりまして、ここのケーソンを造るための作業基地は、現在後片付け等の作業はしていますが、防波堤は当初予定よりは2年ほど遅れましたが、3月30日で完成しました。

○齋藤徳美委員長 遅れても良くできたと思います。これで、釜石港をカバーする体制は、でき上がったということですね。

○伊藤裕裁釜石港湾事務所副所長 現場は相当苦勞されたと思います。釜石港は港内の静穏部も、物流という意味でももとの形に戻りました。あとは道路も完全につながれば、さらなる物流の推進があると思います。

○齋藤徳美委員長 これで釜石は安全にできる体制が十分できたということになりますね。今回補強した分で、東日本大震災津波規模の津波は耐えられる設計でしょうか。

○伊藤裕裁釜石港湾事務所副所長 設計上は、明治三陸の津波に対して設計しています。それ以上のことと言えば、防波堤に対してプラスアルファの効果を期待して石を盛りました。しかし東日本大震災クラスに対して確実に守れるとは言えませんが、一方ですぐには壊れない粘り強さがあるといった状態です。

○齋藤徳美委員長 三陸に限ると東日本大震災津波規模の津波が、結構来ているからこそ、これでハードが絶対安全とは言いきれないという考え方でまちづくりを行うことが一番大事だと思います。

○伊藤裕裁釜石港湾事務所副所長 そうですね。どうしても人の造るものなので、自然に

対して絶対はない。ですから、まずは逃げていただきたいと思っています。

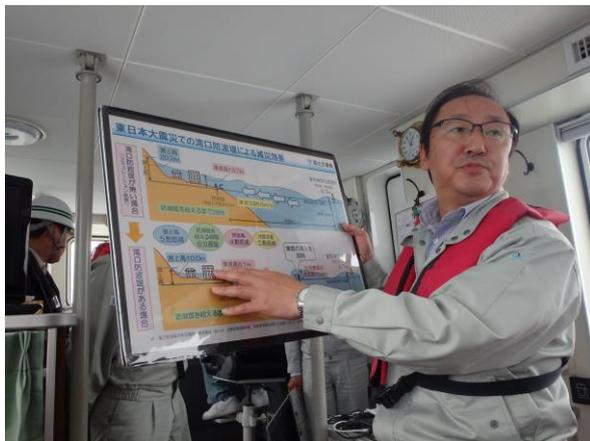
○齋藤徳美委員長 このように立派な物を造って市民を守ろうとしているが、想定外の事象も当然起こり得るといことは、よく自治体にも理解していただきたい。だから我々は敢えて防波堤に関して評価するのではなく、これだけのものがあったら逃げる必要がある、と伝えていきたいと思っています。しかしさすがに防波堤に上がってみると、やはり巨大で、これを造るには、大変な血と汗と涙の結晶があったと思います。本当にお疲れ様でした。

○伊藤裕裁釜石港湾事務所副所長 この構造はスリットタイプといって、防波堤に水が入り、反射を抑えることで、波を弱める効果のあるスリットが二重になっています。もともと二重でしたが、今回復旧する際も同様の形にしました。

○若林治男委員 ここの特徴は、とにかく深くて、63mある。

○伊藤裕裁釜石港湾事務所副所長 復路の際に南堤の前を通りますけれども、-63mの海底面に防波堤を造ったことは、世界記録になっています。前回の事業が完了した際に、ギネス認定されています。幸いにもその部分は震災で生き残ってしまっていて、まだ世界記録です。-63mという深さは、ガントリークレーンよりもまだ深いのですが、防波堤の実際見えるのは上部分だけですので、なかなか皆様には御理解いただけないところもあります。

○齋藤徳美委員長 では、よろしいでしょうか。ありがとうございました。



<釜石市・釜石市役所>

○佐々木復興推進課総括課長 釜石市役所での総合企画専門委員会の現地調査を行わせていただきます。齋藤委員長から一言御挨拶、よろしいでしょうか。

○齋藤徳美委員長 釜石市さんでは防災危機管理アドバイザーを務めさせていただいており、復興に携わらせていただいております。今回釜石、大槌ということで、新総合計画は、なりわい、安全、暮らしに加え、新しい柱として伝承・発信が加わります。

この震災の教訓をいかに守り、二度と災禍が起きないように、新しいものも取り入れたいと思いますので、釜石市さんの取組についてもぜひ参考にさせていただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○佐々木復興推進課総括課長 では、釜石市様、よろしくお願いいたします。

○山崎秀樹副市長 説明の前に、私から一言御礼を申し上げたいと思います。

まず、本日は東日本大震災津波復興委員会総合企画専門委員会で、釜石を御訪問いただきまして、誠にありがとうございます。日頃より皆様には、お世話になりっぱなしのところ、本日もこのような形でお会いでき、大変嬉しく思います。釜石のみならず、三陸全体の復旧、復興に皆様のお力添えで、まずは順調に来ているかなと思います。

震災から7年と2カ月が経過し、一番の課題である住まいの再建等については、釜石は復興公営住宅や宅地の再建、宅地の引渡しが今年度中に完了するというところで、被災者の方々の生活設計がやっと軌道に乗ってくるかなという想いで、復興をある程度実感できる時期になっているかと思います。

このような中で、次のステージを見据え、いかに次の世代に対して誇りを持った取組をつないでいくかが大きな命題でございまして、希望や光づくり、そういったまちづくりの中で様々な活動を行っている状況でございまして。

特に本日の趣旨が、防災、強いまちづくりということで、震災1カ月後にうちも表に出して、市民に対して言っております。今までの震災の取組、検証の取組、あるいはこれからの震災について、委員長がお話しされたとおり、二度と悲劇を繰り返さないという決意を固めながら、いかに全国あるいは内外、市民ともども、子供たち含めて、ワールドカップや復興プロジェクト等、様々な事業が控えておりますけれども、それらを通じて皆様にお伝えしたいという想いで取り組んでいます。ぜひ、皆様のお力添えをいただきながら進めていきたいと思っておりますので、今後とも温かい目で釜石を、三陸を見ていただきながら、御支援いただければ幸いです。よろしくお願いいたします。

○臼澤渉総合政策課震災検証室長 皆様お疲れ様です。総合政策課震災検証室の臼澤です。よろしくお願いいたします。私からは、震災メモリアルパークの整備ということで、お手元に配付しております資料で説明させていただきますので、よろしくお願いいたします。お手元の資料ですけれども、震災メモリアルパークの整備ということで、祈りのパークと津波伝承施設を中心に御説明したいと思います。

1枚目でございます。最初に、メモリアルパークの基本構想、計画の部分について説明したいと思います。この基本計画に当たりましては、平成26年から取り組んでおります。基本構想を立ち上げまして、平成27年に具体化した基本計画、それぞれ委員会を立ち上げまして、具体的な進め方などについてまとめております。特に、このメモリアルパークは、基本理念として「津波による犠牲をなくし、未来の命をまもるために」を掲げています。

この基本理念には、5つの機能を持つことで、それを整理させていただいております。「悼む」、「伝える」、「学ぶ」、「集う」、「防ぐ」、この5つの機能でございます。これを実現するため、大きく犠牲者を追悼する祈りのパークと防災学習施設、この2つの整備を進めるというのがこのメモリアルパークの柱になっています。メモリアルパークには、今申し上げました犠牲者を悼む、防災学習施設については震災を伝える、学ぶといった機能を果たすことで、計画でまとめているところでございます。

続きまして、2ページ目を御覧いただきたいと思っております。今お話ししました基本計画の中で、祈りのパークと津波伝承施設、これを鶴住居地区に、もう一つ東部に作るという計画があるのですけれども、先行しまして鶴住居にこの2つを作るということで、現在、予定をしております。

祈りのパークにつきましては、犠牲者を追悼するということで、防災センター跡地にこれを整備します。この防災センター跡地は、釜石でも最も被害が多かった鶴住居地区にあった施設ですが、この跡地に市民全体の犠牲を追悼する施設ということで整備を進めております。

もう一つ、祈りのパークに隣接する形で津波伝承施設の整備を予定しております。基本的な考え方ということで、この5つを掲げさせていただいております。この施設は、防災学習を推進する拠点とし、そして次世代を担う子供たちを対象とする基本的な考え方を掲げて今展示等の準備を進めているところでございます。

このような基本計画に基づき、これをさらに具体化するため、昨年3つの委員会を立ち上げております。祈りのパークにつきましては、基本計画からさらに発展させたレイアウト、また犠牲者の名前を記す範囲や追悼品の取扱い、このような具体的な事項を協議してまいりました。そして、今説明しました伝承施設の建物レイアウトや展示計画、またソフトの活動プログラムについて委員会を開催して取りまとめているところでございます。

さらに、これらの公共施設、一体的な複数の施設がありますので、この管理運営をどうすべきかと、地域の参画のあり方等の基本的な考え方をまとめております。これらは、平成29年度内に市長報告で基本的な考え方の整理をしているところでございます。

3ページを御覧願います。これは、今説明しましたメモリアルパークの全体像でございます。この位置ですけれども、鶴住居駅が真下にあります。この鶴住居駅前に追悼施設と、にぎわい、交流ということで、観光交流施設等を含めた施設を作ることになっております。この他にも、駅に隣接しておりますので、駅前ロータリーや駐車場、市民体育館等を、このメモリアルパークに隣接して作ることで、併せて整備を進めているところでございます。

市民体育館を除くこれらの施設は、津波復興拠点整備事業ということで今取り組んでおりまして、今年度の3月11日に間に合うようにこれらの施設の整備を行っております。市民体育館につきましては、ラグビーワールドカップまでに間に合うよう、整備を進めているところでございます。

以上が全体のレイアウトでございます。

続きまして、個別の施設につきまして、それぞれ内容について触れさせていただきます。4ページを御覧願います。最初に、祈りのパークのレイアウトでございます。これが犠牲者を追悼する施設ということで、釜石で1,064名の方が亡くなっておりませんが、この方々の名前を刻む場所と、慰霊の場ということで整備をいたしております。それぞれ防災セン

ター跡地に建てるということで、モニュメントも作りますし、今後悲劇を繰り返さないよう、防災市民憲章、津波の高さをあらわすモニュメント等を整備することで、準備を進めております。形状については、盛り土の中央が一部へこんだ形ということで、入口に模型を用意しましたので、帰りに御覧いただければと思います。

続きまして、5ページになります。今お話ししました芳名板、市民の方の名前を刻むということで、それぞれ犠牲者の名前を記す範囲、順番を決めさせていただいております。この芳名板、20mぐらいの半円形状のものなのですが、ここに芳名プレートという金属板に名前を刻んだものを芳名板に張りつける形で、御遺族の方に掲載してよろしいか最終的な確認作業を行っているところでございます。

続きまして、6ページを御覧願います。その中央部には、今申し上げました慰霊の場ということで、芳名板を作ります。上の周辺部の高い所に、それぞれ防災市民憲章の碑と津波の高さを表すモニュメント。津波の高さは、鶴住居が11mですので、基盤の高さ、盛り土の高さ、モニュメントの高さを合わせまして、この高さを示している状況でございます。

防災市民憲章につきましては、これを作るための市民会議を設置しておりまして、今その内容を詰めているところでございます。こちらには、齋藤先生が顧問で参画をいただいております。

続きまして、7ページを御覧願います。防災センターの跡地を示すモニュメント、その遺構であります防災センターのコンクリート片もこの慰霊の場に入れるということで、説明板の解説を予定しております。

以上がメモリアルパークのレイアウトとモニュメントの御説明でございました。

8ページでは、伝承施設の内容について御説明いたします。この建物については、面積334㎡、木造平屋建てとなっております。展示室①、②、③の構成となっております。これに事務室がつきます。展示室①の部分では常設展示、資料等を保管する場所、市民が閲覧できる資料を保管する場所、展示室②は様々な企画展やワークショップ、防災学習等を行う場として準備を進めております。

9ページは津波伝承施設のイメージ図で、施設の外観を示しております。この上から見た模型が後ろにありますので、最後に御覧いただきたいと思っております。

10ページを御覧ください。展示の内容を示しており、大きく2つに分かれております。常設展示部分は震災の記憶のゾーンです。大震災の様子や、防災センターでの出来事、釜石の子どもたち等の展示を予定しております。下の部分では地域の記憶のゾーンで、ワークショップ等の催しを行っており、この2つのゾーンから成っております。

続きまして、11ページ以降につきましては、常設展示、その内容について触れさせていただきます。最初に、東日本大震災と釜石で、釜石の震災の被害状況、津波襲来の様子、発災直後の動き等を、パネルを使いながら説明することを、予定しております。

12ページになります。多くの被害があった鶴住居地区の防災センターの出来事を示しています。なぜこの悲劇が起きたのか、この教訓を活用するためにどのような取組が必要なのかを、センターに残されている時計や壁等のさまざまな遺物を活用しながら展示をしていきたいと思っております。これらは、齋藤先生が展示の監修者で、御支援をいただいているところでございます。

13ページに参ります。これは、展示の大きなテーマで、命を守るための取組、釜石の子

どもたちを示しています。釜石の奇跡、釜石の出来事で、鶴住居小学校、東中学校の避難等の状況を伝えたいと思います。また、これを踏まえて他の市内の小学校の避難の状況、なぜ自分たちの判断で行動して助かることができたのかと、こういった日頃の防災教育の取組の発信をこの場所でできればと思っております。

14 ページですが、震災から学んだことという展示テーマで、さまざまな教訓を学んでいただくというコーナーを予定しております。

15 ページになります。こちらは、常設展示の、もう一つ大きな柱であるソフト事業についてです。外部の方、市外の方が、釜石の防災学習の場としてこの活動プログラムを作るということで今力を入れているところです。大きく防災学習、資料保管、情報発信とありますが、語り部の育成や子供たちが子供たちに語り継げるプログラムを今年1年かけて準備を進めている状況です。この展示とソフト事業が両輪になって、釜石の経験を伝えられればと思っております。

16 ページになります。今後の進め方について示しています。ハード的な整備につきましては、祈りのパークは3.11に間に合うように準備を進めておりますし、設置条例等の議会等への説明等をこれから進めていく予定でございます。

伝承施設につきましては、建物は12月までに整備を終え、3月の期間までに展示を整備していきます。それと併せて、防災学習プログラム等のソフトも準備を進めています。

そして、これらを管理するため、今どのような管理体制が良いか、検討を進めております。この管理者も年度内に決定をしたいと思っております。そして、3.11にこれらの全てが皆様にお示しできるように、急ピッチで準備を進めているという状況でございます。

私からの説明は以上でございます。

○佐々木復興推進課総括課長 ありがとうございます。御質問、御意見等ございましたら、委員の皆様、よろしくお願いいたします。

○中村一郎委員 駅のすぐ前に観光交流拠点施設がございます。祈りのパークや伝承施設のお話がありましたが、管理について、この観光交流拠点施設と津波伝承施設は、一体的に管理をされるのでしょうか。

○臼澤渉総合政策課震災検証室長 考え方については公共施設の管理運営委員会というところでそのあり方を検討していますが、現段階ではメモリアルパークは観光交流施設、市民体育館も一体的に管理することで調整をしています。

○中村一郎委員 具体的な管理団体はこれからという話でしょうか。

○臼澤渉総合政策課震災検証室長 はい。

○中村一郎委員 ありがとうございます。

○若林治夫委員 いくつかお聞きしたいのですが、まず鶴住居駅に東口は出来るのでしょうか。

○臼澤渉総合政策課震災検証室長 今のところは、できる予定はないです。

○若林治夫委員 ワールドカップの際は、どのような動線になるのでしょうか。

○山崎秀樹副市長 ホームから観光交流施設にはスロープがありますが、線路の反対側には通路がない状況です。そのため、鶴住居駅のホームに待ち合い機能を持たせるとことと、観光交流拠点施設にもある程度の待ち合い機能を持たせる予定です。その前を通過して右側の市民体育館の脇の所に横断する、鶴住居駅地下通路ができます。

○若林治夫委員 この地下通路はボックスになるのでしょうか。

○山崎秀樹副市長 そうです。ちょうど突き当たりの所は高くなっていますので、ここの道路は真っすぐ行って出られる状況です。そちらを通過して、スタジアムに行けば、駅から約5分で到着するかと思います。

○若林治夫委員 車での来場者はどこに駐車するのでしょうか。体育館前の駐車場ですか。

○臼澤渉総合政策課震災検証室長 駐車場は祈りのパーク、伝承施設と観光交流拠点施設の駐車場という理解をしていただきたい。

○若林治夫委員 もう1点。4ページを見ると、芳名板があり、献花台もありますが、私ならここで手を合わせますね。だから、この上の祈りの場、例えば市民憲章の所で祈りはしないだろうと思うのですが、いかがでしょうか。

○臼澤渉総合政策課震災検証室長 未来に向けてどのように市民が取り組んでいくかといった未来志向の祈りの場です。犠牲者を慰霊する場と未来に向けて悲劇を繰り返さないことを祈ると、そういう場の区別をしています。

○山崎秀樹副市長 この区分をした経緯には、やはり亡くなった方々の御遺族の方々の想いと、被災全体に対するこの教訓を忘れないという両面性を一緒にしてしまえば、すごく問題になると思ったからです。ですから、下の方は本当に慰霊の場で、もう静謐な、厳かな中で手を合わせる場所、それから上の方は、海の方角を向いて祈るような場です。亡くなった方だけではなく、様々な意味での祈りを行っていただける場にしております。

○若林治夫委員 上までたどり着くのに長いなと思い、ノーマライゼーション的には、いかがでしょうか。

○臼澤渉総合政策課震災検証室長 車椅子でも行けるようなスロープを、健常の方は近くの階段をとということで、付けさせていただいております。

○若林治夫委員 わかりました。

○齋藤徳美委員長 二度と災禍を起こさないという形が一番大事なところで、この調査委員会を行った際には、遺族の代表者の委員も入っていましたから、どのように教訓として残すか話し合いました。基本的には建物を残すということが、後々まで忘れないと。しかし、遺族会全体としては、残したいという人もいるが、多くはやはりつらいというお話がありましたので、その意向を尊重しました。しかし大事なことは、ここまで津波が来ましたということを、示さないと教訓にならないと思います。そこで、皆様が工夫して、この津波の高さを示すモニュメントを、遺物として見ていただくということでまとまったと理解しております。

です。ここで、ここまで波が来ましたよということと併せて、この憲章を眺めながら、次のような対応をしていこうかということを考え、最終的にこのようなイメージになったのだと思います。

○若林治夫委員 あと1点だけ申し上げます。私の希望とすれば、冬は無理でしょうが、四季折々の花が、ずっと続く花壇がどこかにあればと思います。これは桜を意識しているのでしょうか、そういう感じで何かあればいいなと思います。

○臼澤渉総合政策課震災検証室長 スロープ沿いにはドウダンツツジの植栽を予定しています。

○山崎秀樹副市長 管理費も一つの大きな課題でもございますし、その辺りとの兼ね合い

でこのような形にしております。

○齋藤徳美委員長 これは非常に重要だけれども、御遺族の方がこういった場所で集えれば、お花を植えたり管理したりする活動があれば、意味のあることですし、この地域の方々の方がそういった役割を演じられれば良いと思います。

○臼澤渉総合政策課震災検証室長 まさしく管理については、地元の方々がいかに関わっていくか、関わっていきけるかということで、これから様々な地域で、大切なことだと思います。清掃等も含め役割分担、参画の方法を協議することで予定しております。

○山崎秀樹副市長 大事なことは、清掃もさることながら、一番は語り部、ここの施設をどのように地域として使っていくかという部分。防災プログラムの作成や地域とともに、地域の方々も一緒に作っていきましょうというのが伝承施設の大きな役割という意見がたくさん出ています。ですから、どのような方法で管理委託をしながら進めていくかというところがこれからの具体的な課題です。

○臼澤渉総合政策課震災検証室長 様々な語り部の方や地域の方々、学校、これらのネットワークなど、協議会等を作り、この施設を利用した防災学習プログラム、ソフトなどの仕組み作りに取り組んでいく予定です。

○齋藤徳美委員長 震災被害の大きな原因は、結局適切な場所に避難ができなかったということ。ここは津波の一時避難場所ではないにもかかわらず集まってしまった。だから、適切に避難することが一番の基本なので、そのためには釜石市さんには、防災訓練をして、住民の人がちゃんと避難場所に行くことを提案して、そのための対策行っていますよね。ですから、この地域の方々が、自分たちの命を守るために、例えば訓練の時もリーダーシップを発揮したり、普段から啓発活動をしたりと、ここを活用しながら、適切な避難に結びつけていかないと、なかなか難しい。

だから、こういった場所に1人防災士等の資格を持った方が中心となって、ここで日頃から訓練に参加しましょう、あるいはこれから対策をしましょうということが継続して議論され、話し合われ、いざ訓練になったらリーダーシップを発揮するといった実学が培われる拠点になってくれればと思います。

○谷藤邦基委員 津波伝承施設は、入場料は発生しますか。

○臼澤渉総合政策課震災検証室長 無料を予定していますが、ソフト事業や語り部について、考えると完全無料というわけにはいかないかとも考えています。ただし基本的に入場料については無料ということで考えています。

○谷藤邦基委員 費用は、市の持ち出しになる場合、建てる時は補助金等で何とかありますが、持続するためには維持費が毎年かかってしまう。そのため、入場料も必要ではないかと思うのですが。

○臼澤渉総合政策課震災検証室長 国の施設との関わりや様々なまちの防災、あるいはそれぞれの被災の関係状況を理解するための一施設ですから、うちはそれらのサテライト的役割をしながら、釜石の部分の理解、全体的なものはそちらのほうでしていただきながら回っていただくというのが理想です。防災に対する考え方、教訓を発信するというのが大きな仕事だと思っていますので、採算や管理費を極力抑える部分については深く考えてはおりません。

○平山健一委員 おっしゃったように、やはり国の施設、この広い連携のもと、何か三陸

の祈りを大々的に発信する一つの拠点になってほしいと思います。また、鶴住居の教訓は、やはり国際的にも発信すべきものなので、できたら多言語の表示もやってほしいと思います。

○**臼澤涉総合政策課震災検証室長** その部分は、ラグビーワールドカップもございまして、ワールドカップを見に来る方々については、やはり釜石の教訓、あるいは釜石の防災を見に来ると思っています。ですから、多言語も当然対応していきたいと思います。

また、釜石だけではなく、様々な近隣市町村と連携し、各市町村の特色を出したプログラムを組んで御覧いただくことで観光の一面にもつながると思っています。

○**平山健一委員** ぜひよろしくをお願いします。

○**齋藤徳美委員長** 陸前高田市の伝承施設は、県が維持していますよね。だから、ある意味では陸前高田市の施設は、一番大がかりな震災そのものに対するコンセプトで進んでいます。そこが一つのサテライトとなり、各地域の伝承、追悼という形があるので、うまくネットワークを組み、一体化して活用されたいと思います。

○**臼澤涉総合政策課震災検証室長** 先ほどサテライトというお話しがございましたけれども、コアの部分がやはり陸前高田市さんにあり、そこからのサテライトがあって、三陸全体を回っていただくのが一番望ましい形だと思っています。

○**千葉技監兼副局長** 陸前高田市の伝承施設は、県のゲートウエーといった役割を自覚しておりますので、その中で、各地に展開していただこうと考えております。

○**佐々木復興推進課総括課長** 大変申し訳ございませんが、お時間となりました。

○**臼澤涉総合政策課震災検証室長** いつもどうもありがとうございます。

○**齋藤徳美委員長** 本日はどうもありがとうございました。



<大槌町・大槌駅>

○佐々木復興推進課総括課長 それでは現地視察を開始いたします。齋藤委員長、一言御挨拶をよろしくお願いします。

○齋藤徳美委員長 大槌を本日お邪魔したのは、震災対応は様々あると思いますが、縦の動脈としての三陸鉄道が3月に全面開通すると、これまでのJRとは異なり、地域密着の列車として、市町村側がどのようにまちづくりをするかはとても重要になります。鉄道はお年寄りや子供たちにとっては大切な交通手段ですし、三陸鉄道の位置づけについては、議論して考えていただかなければならないと思います。本日は、まちづくり等のポイントを教えていただきたいので、全体の災害のことというよりは、三陸鉄道を中心とした街づくりについてお話いただければ幸いです。どうぞよろしくお願いします。

○太田信博総合政策課企画調整班長 本日は、大槌町にお越しいただき、誠にありがとうございます。あいにくの雨ですが、まず今回大槌駅の会場で説明させていただきます。お時間が限られていますので、早速、御説明させていただきます。申し遅れましたが、私、大槌町役場総合政策課の太田と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

○松橋史人総合政策課企画調整班主事 同じく担当の総合政策課まちづくり班の松橋と申します。よろしくお願ひします。

○太田信博総合政策課企画調整班長 それでは、お手元の資料の18ページから御説明いたしますので、御覧ください。

現在の大槌町の復興状況ですが、町方地区を航空写真で撮ったものになります。こちらは昨年12月に撮影したものです。

御社地エリアの復興拠点施設から御説明します。来週6月10日オープン予定の文化交流センター「おしゃっち」ですが、隣接する御社地の公園は、震災時の盛り土をしていない高さにしております。そのため、現地では震災前の高さが体験できます。交流センターの2階は震災伝承室となっており、これまでの復興状況や災害状況がパネル等で見られる資料室となっております。

「おしゃっち」は、駅から徒歩3分の場所にあります。そこから震災前の大槌町商店街、末広町商店街の商工業者の方々が再建している場所が広がっています。そのため、我々としては大槌駅から足を運んでいただき、公園で震災前の高さを感じていただきながら、震災から復興までの歩みを文化交流センターの震災伝承室で見えて聞いて感じていただき、そのまま商店街に足を運んで、大槌町の復興状況を体験していただければと思っております。

施設の概要としましては、大槌町立図書館が3階に入っており、平成29年12月から工事開始で、ようやく来週オープンという状況です。

正式名称は大槌町文化交流センターですが、愛称募集ということで応募しました。約300通の様々な名称の応募があったと聞いています。その中で「おしゃっち」という名称に決定し、地域の方々も愛着が持てる施設であると思っております。

20ページを御覧ください。こちらの資料は、鉄道の復旧進捗状況でございます。これまでの経緯を簡単にまとめました。まず平成23年3月、御存知のとおり震災により甚大な被害を受け、不通になりました。平成24年には、BRTによる復旧を断り、その後平成26年12月に車両の無償譲渡、移管協力金等、条件の受入に合意し、その後平成27年2月に基本合意書及び覚書を締結させていただいております。平成27年3月には、復旧工事の

着工式を開催しております。その後、平成 27 年 6 月には一日も早い復旧工事の完成を J R 東日本に要請しております。その後、平成 27 年 7 月には J R 東日本さんと協定書を締結し、平成 29 年 2 月には負担金と激変緩和措置等について合意という、これまでの経緯をまとめております。

次ページを御覧ください。こちらが大槌駅舎のデザインです。このデザインは、平成 29 年 8 月に大槌駅のデザイン総選挙で 3 案から選ばれました。町民以外の方も投票でき、全体で 1,701 票が投票され、このデザインが選ばれました。

22 ページを御覧ください。駅舎整備のスケジュールです。平成 29 年 4 月から記載しておりますが、これまで基本設計、実施設計等を行い、先月入札し、建設工事が決まりました。7 月上旬から着工予定で、指定管理等については、今後 9 月もしくは 12 月の条例制定を受け、準備を行い、来年 3 月には開業を目指しております。

大槌町といたしましても、震災によって人口減少しております。また、これまで震災で各団体、全国から支援していただいた方々が多数いらっしゃいます。そのような絆を大切にし、この駅を使っていただきながら、大槌町の復興状況を感じていただけるようなまちづくりを目指して日々取り組んでおります。簡単ではございましたが、説明は以上となります。

○佐々木復興推進課総括課長 ありがとうございます。それでは、御質問等ございますでしょうか。

○齋藤徳美委員長 三陸鉄道が生活の交通手段として使用されなければ、当然赤字になります。様々なイベントを考えていただき、大槌に来ていただき、見ていただくということも一つの大事なポイントだとは思いますが、しかし、地元の方が乗らない限り定着しないと思います。首長さんもぜひ出張で三陸鉄道を使用していただけるよう、政策的に地域の方々が乗る仕組みを作っていかなければならない。また、それを県が支援する形でなければいけないと思います。赤字になってしまえば、30 億円の持参金も枯渇し、最終的には赤字補填を自治体が行うこととなります。赤字補填するならば、地元の方のお金なので、地元の方が利用しなければ意味がない。極端に言えば、鉄道利用できる人は利用して職場に来る、あるいは出張は三陸鉄道を使うなど、町として具体的なアイデアを出してほしい。また、県で、大槌病院に通う方は三陸鉄道を使えば初診料を半分にするなど、今までにない発想をしなければいけないという危機感を私は持っています。駅舎を馴染みのあるものにしようということで、投票等を実施されておりますが、ぜひ緻密なところでひとつ考えていただきたいと思っております。

○松橋史人総合政策課企画調整班主事 今、開業に向けたサポーターを、昨年のデザイン総選挙のときから募集しており、町内問わず、東京の方もおられますが、開業サポーターになっていただき、3 カ月に 1 回程度サポーター会議を行っております。進捗状況等を御報告する会議の一方で、昨年度は実際に南リアス線に体験乗車会を開催し、中村社長にも御参加いただき、サポーターを中心に実施いたしました。

○中村一郎委員 その節は誠にありがとうございました。

○松橋史人総合政策課企画調整班主事 今年度も北リアス線でイベントを行おうと思っております。皆様の意識を高め、ぜひ利用したいという意欲のわくような取組を行いたいと思っております。現在 30 名ほどの参加予定で、結構若者の方も登録していただいております。高校

生も5名ほどおり、前の体験乗車会でも、女子高生が4名来てくれました。

○中村一郎委員 釜石方面に出る大槌の高校生は、現在はバスで通ってらっしゃると思いますが、3月以降はぜひ三鉄を使っただけであれば、今よりも快適に通っていただけたらと思いますので、ぜひまた御相談させてください。

あとは、駅前周辺ですね。皆様早く戻っていただければ、駅、列車の利用者も増えると思いますので、ぜひ引き続きよろしくお願ひしたいと思います。

○谷藤邦基委員 駅舎は、この辺りにできるのですか。

○松橋史人総合政策課企画調整班主事 はい。現在、黄色い点字ブロックがあるところが入口になり、幅は約30mですので、160㎡を想定しておりました。

駅舎は、蓬莱島と、ひょっこりひょうたん島になぞらえてこのデザインとしております。せっかくですので、NHK様にひょっこりひょうたん島とコラボ取組の御相談を進めている状況です。

○齋藤徳美委員長 イベントも大切だけれども、生活に密着することが大事だと思います。高校生が1人定期を買ったら200人分にも値するという話を聞いたことがあります。だから通学定期に関しても、様々な工夫をしていければありがたいと思います。宮古も市役所が駅前に移ります。もともと商店街が駅前にあります。そうすれば、交流人口が三陸鉄道を利用することが増えます。大槌町も駅から役場が遠いわけではないし、目の前に商店街も住宅地もあるので、駅が中心のまちづくりしていただき、なるべく乗っていただきたいと思います。そのためには、大々的な宣伝や試乗会を行うなど、様々な方法があると思います。

○谷藤邦基委員 公民館の利用者は結構いらっしゃいますか。

○松橋史人総合政策課企画調整班主事 公民館に併設して城山体育館がございますが、施設利用者は結構いらっしゃいます。震災当時は本部を設置していました。

○中村一郎委員 様々なイベントは、そこの公民館や体育館で行っていますよね。

○齋藤徳美委員長 病院や公民館へのシャトルバスも、定年退職後の方など経費節減しながら雇用創出を行えば、健康に留意して医療費もかかなくなる。工夫しようと思えば知恵は出てくると思います。私は復興と三陸鉄道の利用は非常に密接で、三陸鉄道を失うことは沿岸のまちを失うことと同義と大胆ではありますが考えています。

○若林治男委員 御社地の公園で水が湧いていますか。

○松橋史人総合政策課企画調整班主事 湧いています。ごくわずかですが、湧いています。しかし排水ができないので、ポンプで排水をしています。

三陸鉄道の開業に合わせて、町内の公共交通も一転する予定で、大ケロ地区と三枚堂地区に長い約1kmのトンネルができましたので、三陸鉄道の開業に合わせて循環バスを回そうかと計画しております。

○佐々木復興局長 駅から大槌高校までは徒歩何分ですか。

○松橋史人総合政策課企画調整班主事 高校生の足で約30分だそうです。震災前は吉里吉里地区や釜石地区の生徒は、大槌駅で降りて、自転車で約15分かけて大槌高校に通っていたそうです。

○齋藤徳美委員長 通学リアスや通院リアス、JRと繋がれば首都圏シャトルや盛岡シャトルなど、名称も大切なので、明確な目的を持たせた運行にしていくことも大切かと思いま

す。

○中村一郎委員 現在、JRさんとも様々な調整をさせていただいていて、ダイヤも来年3月まで決めています。市町村さんからも様々な御意見をうかがいますので、どうぞよろしくをお願いします。

ちなみに、駅の向こう側は、公園か何かになるのですか。

○松橋史人総合政策課企画調整班主事 現時点の構想では、約2haの鎮魂の森を作り、サッカー場と野球場を設置する予定です。残りの土地利用に関しては未定です。

○佐々木復興推進課総括課長 その他、よろしいでしょうか。

○太田信博総合政策課企画調整班長 1点だけPRをさせてください。来週日曜日に「おしゃっち」がオープンに合わせて、イベントを行いますので、どうぞよろしく願いいたします。それでは、雨の中、本当にありがとうございました。



<大槌町・(株)ゼネラル・オイスター大槌センター>

○佐々木復興推進課総括課長 それではゼネラル・オイスター大槌センターさんでの総合企画専門委員会の現地調査を行わせていただきます。まず委員長、御挨拶をよろしく願います。

○齋藤徳美委員長 なりわいの再生というテーマで本日拝見させていただきますけれども、水産加工業のなりわい再生は、岩手県にとって不可欠でありますけれども、非常に厳しい状況であることもうかがっております。その中でも御社は非常に献身的に様々な工夫をされているということで、色々と学ばせていただきたいという思いでお邪魔させていただきました。どうぞよろしくお願いいたします。

○佐々木復興推進課総括課長 それでは、吉田社長様よろしくお願いいたします。

○吉田琇則代表取締役社長 皆様こんにちは。ゼネラル・オイスターの代表の吉田でございます。本日はお忙しいところ、またお足元の悪い中、お越しくださいます、誠にありがとうございます。

本日は会社の説明と工場内を御覧いただければと思います。早速説明に入らせていただきますが、資料1ページ目を御覧ください。私は岩手県旧都南村出身でございます。今年51歳ですけれども、盛岡四高、日大、エイベックスを経て、この会社を設立し、今年で設立19年になります。

この会社を設立した理由は牡蠣が大好きだったからです。日本は海に囲まれているので、様々な魚介類を刺身など生で食べますけれども、海外では最近の日本食ブームが来るまで、生の魚介類は食べませんでした。しかし唯一、牡蠣だけは昔から生で食べられている食材で、そういった意味でもとても歴史と伝統のある食材だと感じました。

しかし、生牡蠣はどうしても当たるイメージがありますので、ホテルさんもなかなか扱いづらい食材でした。牡蠣好きの私としては、どうしても皆様に安全で美味しい牡蠣を召し上がっていただきたいということで、2001年に1号店を作り、現在は全国30店舗に拡大しております。

我々は画期的な牡蠣を提供するため、大槌や富山県入善町、愛媛県宇和島市、沖縄県久米島など、店舗だけでなく生産から弊社で行い、牡蠣を日本全国で扱っていることが特徴的な会社でございます。

牡蠣の種をつくって種苗して、海面の養殖を愛媛県で行っており、沖縄県の久米島では世界初の陸上養殖も行っています。大槌では浄化殺菌、加工、卸売、小売までを行っております。牡蠣というと約8割がカキフライとして食べられていますけれども、我々のお店では、焼牡蠣や蒸牡蠣などがある中で、一番人気は生牡蠣で7割を占めています。そういった意味では、やはり安全な牡蠣であれば生で食べたいというニーズが強いなと感じています。我々も2006年のノロウイルス騒動の際は、二枚貝、特に牡蠣は危ないという風潮がありまして、お客さんが激減しました。そこで我々は、自社で安全を確立しようということで、種苗、養殖から行うこととしました。

牡蠣が当たる理由は、牡蠣が1時間に20Lの水を吸う特徴が関係しています。川の上流から生活排水など、一般細菌や大腸菌を含んだ水をすごい勢いで吸うと、それらが牡蠣のお腹に溜まってしまって、我々はその牡蠣を食べてお腹を壊すという流れになっています。そこでその特徴を逆手にとって、綺麗な水を丸々2日間ぐらい吸収させることで、お腹の

汚れが綺麗になる仕組みを取っています。

我々、昨年特許を2つ取得しましたが、そのうちの1つが富山県入善町で海洋深層水を使って牡蠣を綺麗にするというシステムです。これまでは、ここ大槌でも行っている紫外線殺菌が一般的でしたが、このシステムを使えば、従来よりもはるかに綺麗な牡蠣が取れます。先ほど牡蠣はホテルさんもなかなか扱いづらいと申しましたが、我々の牡蠣は安全と認められ、東京のホテルさんや、外資系のホテルさんも、我々の生牡蠣を使用してくださっています。先日、トランプ大統領さんが来日された際に召し上がった牡蠣も我々の牡蠣ということで、世界的にも品質が認められています。

さて、工場をなぜ大槌に建設した理由でございますが、これはまさに恩返しです。実は我々、ノロウイルス騒動の際に、業者さんにお金払えず会社が潰そうな状態になっておりました。その時、大槌町と漁協の皆さんに代金後払いでいいとおっしゃっていただいて、我々は助かりました。もちろんその後全て返済しましたけれども、このような素敵な御恩をいただきましたので、我々も震災後、何か手助けできないかということで、牡蠣1個につき1円寄付をすぐに行いました。大体年間800万個ぐらい牡蠣が食べられているので、年間800万円、牡蠣を洗浄する機械などの購入支援をさせていただきましたが、やはり大槌で雇用創出し、岩手の牡蠣のブランド化を行いたいと考えました。将来的には、この加工工場だけでなく、レストランや物販施設も作っていきたいと考えています。

最後になりますけれども、こちらで売り出している商品について10ページに掲載させていただいております。そして、11ページ、もう既に東京ではこの牡蠣を販売しており、御好評いただいております。牡蠣は好き嫌いが分かれる食べ物ですが、好きな方はとても好きな方が多いので、リピーターさんがとても多いです。まだ始まったばかりではございますけれども、大槌発の加工品ということで全国にしっかりとアピールしてまいりたいと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

○佐々木復興推進課総括課長 ありがとうございます。委員の皆様、御質問はございますでしょうか。

○豊島正幸委員 特許2種類ということでしたが、内容を教えてください。

○吉田琇則代表取締役社長 1つは富山県入善町で行っている海洋深層水で牡蠣をきれいにする仕組みです。もう一つは沖縄県久米島で行っている海洋深層水で絶対当たらない牡蠣を作る仕組みです。生活排水も一切関係ない環境で牡蠣を養殖しようと考えて日本全国探してみましたが、日本にはそのような環境がないことが分かりました。そのため、海洋深層水をくみ上げ、そのきれいな水で陸上養殖しようという特許でございます。富山県は380m、久米島は640mから汲み上げております。

○佐々木復興推進課総括課長 ありがとうございます。それでは、一度、生産工程の御説明をいただき、またその後御質問の時間とさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○吉田琇則代表取締役社長 生産工程につきましては、こちらの大槌センター長の浦嶋から御説明差し上げます。

○浦嶋健大槌センター長 浦嶋と申します。よろしくお願いいたします。それでは、工程手順を説明してまいります。

○谷藤邦基委員 窓越しに工場の中が見えますね。

○浦嶋健大槌センター長　そうですね。ここの工場は、衛生面を考えた一方通行の工場になっております。大きく裏側が入口のホームになっており、裏側から入ってきた原料を、殻付き牡蠣の場合、一度水槽棟で浄化していきます。この浄化水も海水を汲み上げたものを紫外線殺菌して使用しております。この裏の施設にあるプラントが海水を汲み上げ、紫外線殺菌をした水を作って、ここへ流し込む仕組みとなっております。また、裏のプラントできれいに浄化をしたものを排水するシステムも取り入れております。富山県の牡蠣は生食用牡蠣のためですが、大槌では基本的に加工用、加熱用の牡蠣を店舗に向ける原料として製造しております。

この工場のメインはI Q Fと呼ばれる冷凍ツブガキの製造になります。フルシェル冷凍といい、殻付き牡蠣をそのまま冷凍します。これも6月以降、牡蠣が手に入りにくくなる時期に加熱用牡蠣として店で提供するものになります。

まずは、ここに原料が入ってきますので、一度ここで殻付き牡蠣の浄化をして、冷凍処理していきます。次の部屋が牡蠣のむき身室になっております。ここでは、いわゆる殻付き牡蠣が入ってきた際に、殻が半分、半生貝といいますけれども、そのような形状に処理をしたものを冷凍しております。殻付き牡蠣グラタンなどがあり、加熱するだけで食べられる状態のものがありますが、そのようなものを作っております。

ここは窓越しに工場見学ができる状態にしておりますが、食育等の教育の場として提供したいということで、一連の加工の流れを御覧いただけるようにしております。奥の冷蔵庫はチルド庫になっており、原料や仕掛かりの原料等が入る施設となっております。

メインの加工室はこちらです。実は先日30日までI Q Fとフルシェルの冷凍処理が行われておりましたが、西日本の牡蠣の最盛期が終わり、抱卵し始める時期になりました。そのため、5月末で西日本の牡蠣を終え、6月後半からは三陸の牡蠣が入ってきますので、今日は端境期ということで御覧いただけず、申し訳ございません。ここでは店舗向けのカキフライを製造していく形となっております。こちらのカキフライ製造マシンで1日3,000から6,000個のカキフライを製造しております。カキフライも、自社店舗向けですが、クオリティー最重視ということで、市販の業務用カキフライは、衣率が50%以上ですが、弊社では出来る限り牡蠣の粒の大きいものを作ろうと頑張っております。代表からは、世界一のカキフライを作れということで命を受けておりますので、薄衣のカキフライを是非作っていきたいと思っています。奥側から牡蠣を投入し、バター粉をつけて、パン粉をつけて、この最後のコンベヤーで揚がったカキフライが出てくる仕組みになっております。この白いベルトのコンベヤーで、トレーに並べてトンネルフリーザーですぐ凍結するという形になります。メインの機械がトンネルフリーザーですが、製造規模はこれで決まります。これがフルにどれだけ動いていくかが大切ですので、まだここの工場は私を含めて5名しかスタッフがおりませんので、約1カ月間、稼働日数は15日ですが、毎日必死に朝7時から夜7時まで頑張りました。季節労働になりますので、年間スケジュールで稼働スケジュールは考えておりますし、残業代もしっかりといただいておりますので、労務関係の問題はありません。

さて、こちらのカキフライを約30分通り、凍結したものがこちらに出てきます。奥には包装スペースがあり、凍結したものがすぐ梱包できます。さらに奥で、今作業しているのは、商品開発室で、こちらで様々な店舗向け商品や一般小売向け商品の開発、製造

を行っております。ほぼ必要な設備は整っておりますので、できないものはない状態になっております。以上がこの工場の流れになっています。

○佐々木復興推進課総括課長 ありがとうございます。御質問はございますでしょうか。

○豊島正幸委員 カキフライの粒の大きさが求められるとありましたが、生産者に対しても、このような牡蠣を作ってほしいという要望は伝えているのでしょうか。

○浦嶋健大槌センター長 そうですね。私どもも全国の牡蠣を取り扱っておりますので、その中で一番自分たちに見合っているところの牡蠣、今殻付きの牡蠣で店舗に向けて出させていただいている生産者さんをお願いして、専用に仕入れさせていただいております。

今年は、1月からスタートして、この5月末までで50トン近くのツブガキを製造する計画がありましたが、実入りの状態がよくなかったので、1月、2月に仕入れができなかった。3月になって実入りが良くなった頃に、今度は貝毒が発生し、その影響で1カ月棒に振って、5月だけで何とかしようということで頑張っていました。

○豊島正幸委員 こちらをはじめ、そういったニーズが増えると、生産者側もやはりそれに合わせようとする努力があると思います。例えばいかだの数を戦略的に減らしてというような取組を行うところも出始めると思うのですが、そのあたりの現状は何かお聞きでしょうか。

○浦嶋健大槌センター長 そうですね。生産者の方々も、過密し過ぎて牡蠣の状態がよくないということで、間引きをして牡蠣棚を減らして行うとは聞いています。また兵庫の生産者さんの中には、状態のいい海域まで船で引っ張っていき、時期ごとに置くという工夫をされているところもあります。

○吉田琇則代表取締役社長 補足させていただくと、ブランド牡蠣の多くは生産者が専業です。しかし岩手ではホタテも牡蠣もとなってしまう。どうしてもいい牡蠣は、手間暇かける必要があるので、本当は牡蠣で生計を立てられるのであれば、専業で牡蠣を行っていただきたいのですが、なかなか厳しいともうかがっています。

○齋藤徳美委員長 岩手産牡蠣は、どのあたりの牡蠣を使われているのですか。

○浦嶋健大槌センター長 去年は、釜石漁協さんから御提供いただきました。しかし、まだ絶対量が三陸では揃わないというのが現状です。

○吉田琇則代表取締役社長 牡蠣を御提供するには、やはり安全が一番大切だと感じています。我々も百貨店等に出店させていただいておりますが、御存知のとおり、日本はデフレなので、どうしても価格に転嫁できないという現状があります。そこで、我々は海外展開ということで、一生懸命輸出しているのはアジアです。例えば香港の高級ホテルでは、フランス産牡蠣が1個900円、うちの牡蠣は1,500円。そういった意味では、実は海外でのジャパブランドという意味で一役買ってくれています。

海外ではこの価格での販売ですが、日本では安く食べられるように、そして、是非うちの店舗で召し上がっていただければ、さらにお安い価格で提供できるように頑張っています。

○齋藤徳美委員長 しかし、このように高付加価値化してくれば、生産側もやる気を出せば大きな対価となる。大抵の場合はいいものを生産してもなかなか高付加価値でとってもらえないという事例が多い。結局、まとめて安く売って、ということになってしまう。

○吉田琇則代表取締役社長 我々の強みは、最大の消費先が自社店舗であることだと思

っています。この一番の強みを生かして、これからも前進していきたいと思ひます。

○若林治夫委員 牡蠣という結びつく飲み物は、まずはワインではないですか。ワインも、行おうという計画はありますか。

○吉田琇則代表取締役社長 そうですね。いつか大槌でワインも作りたひとは思ひていますが、まずは、ここで牡蠣を召し上がっていただく環境を整えないとですね。

○佐々木復興推進課総括課長 それでは、盛り上がるのところ、大変申し訳ございませんが、お時間となつてしまいましたので、以上となります。本日は、誠にありがとうございました。



<まとめ>

○齋藤徳美委員長 齋藤です。本日のまとめとして、各委員から一人一言ずついただければと思いますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

○若林治男委員 本日、釜石、大槌ということで拝見させていただきましたが、建物が少しずつ建ち並び始めるなど、格好はついてきている様に思います。その一方で、まだまだ復興途中のようにも感じました。やはり完成した施設をどのように管理、活用していくかは、今後考えていかなければならない、そのあたりは懸念に思います。

そして、どのようにお金を稼いでいくかということも、もう少し真剣に考えていかないと、立ち行かなくなってしまうと感じました。

最後の牡蠣もそうですが、あそこに行けばあれが食べられるというような、観光客の目的地となる地域が、今後もどんどん増えて行けば良いなと感じました。やはり三陸は食、文化、郷土芸能など、魅力がたくさんありますので。本日は誠にありがとうございました。以上です。

○平山健一委員 平山です。本日は、企画大変御苦勞様でした。とてもいい準備をしていただいて、参考になるような所をたくさん見せていただきました。

ヒカリフーズも牡蠣工場も水産加工として非常に付加価値の高いものを出していますが、スラリーアイスなど科学の知識が相当使われていると思います。最近JSTも撤退が多くなり、大型プロジェクトの導入きっかけの補助金がほとんどなくなっている状況で、何かきっかけを与える、目標を導入する手助けは今後も絶えず行っていただきたいと思ひます。科学技術の水産加工に取り入れようという雰囲気ぜひ助長して助けてやってほしいです。

また、大槌町は様々なアイデアが出てきているようですが、あの用途未定の空き地の広さを見ると非常に不安に感じました。また、観光協会からの要望、一過性のイベントばかりではなく、何か実のある支援をお願ひしたいと思ひます。三陸DMOも行っておりましたが、異業種間や広域間の連携を少し強めて、もっと県が立ち回れるような仕組み作りを行ってほしいと思ひます。

また、ヒカリフーズでも6名の外国人研修生を受け入れておりましたが、今回も政府が受入を進めるということで、50万人目標としておりますが、地域の国際化を上手な形で日本社会に溶け込ませる必要があると思ひます。県もしっかりと方針を示して、共生社会を推進していただきたいと思ひます。以上でございます。

○豊島正幸委員 豊島です。2点お話しします。

1点目はヒカリフーズです。社長さんのお人柄、謙虚さあるいは地元を思う気持ちがずっと入ってきました。そして、その取組の一番大事な点は、何回もおっしゃっていましたが、「継続」という言葉が印象的です。お金が切れたときに取組も終わるようでは、何にもならないというのは、本当にそのとおりで思ひました。現在の継続は、一所懸命取り組んだ結果なのでしょう。一つ一つのつながりができ、次の取組に発展し、さらに太い流れになっていく期待感がありました。その継続、震災から7年経過しましたが、産学連携のあり方が、復興からCSRへとステージが変化してきている様に感じます。復興支援からCSR、この流れが定着していくのではないかと大いに期待しています。

2点目はゼネラル・オイスターです。質問もさせていただきましたが、南三陸の志津川

あたりでは、戦略的にいかだの数を減らして、消費者側が求めるものを作ろうとしています。志津川は殻付き牡蠣に特化していますが、そういった流れの中で殻の形状、縦、横、厚さを一定の範囲におさめるように作っています。そして市場に高い値段で出回っております。震災があり、生産現場が市場を選び、生産現場自体が変わってきています。それは、見えるところが多い。やはり市場から生産現場に求めるものがある、現場の人がそれに応えようとする努力、それが震災後に見えるような形になったと思いますので、ぜひ、支援をお願いできればと思います。以上です。

○谷藤邦基委員 ヒカリフーズさんもゼネラル・オイスターさんも売り先がしっかりしているかが大切ということは、メーカーと共通するところだとつくづく感じました。ゼネラル・オイスターさんの場合は、オイスターバーから始めているので、自分のところで売れるという強みがあり、川上へ展開してきたという流れは、とても安心感を持ちながら発展したのではないかと感じました。一方で、ヒカリフーズさんは、震災後に会社を起こして、販売先も開拓されたということで、これは非常に大変なことだと思いました。再建されている店舗も今、過大設備で苦しんでいるところも多いですが、結局はもともとの販路イメージで生産量を想定して設備投資してしまったのではないかと思います。

ヒカリフーズの社長さんはよく動かれ、社長の熱意のなせるわざだと思いますが、様々な組織や人をうまく活用しています。とにかく販路を押さえてある、あるいは販路が開拓できるというのは非常に重要なことだと思いました。

補助金の話もありましたが、食品加工業に限らず、一時的に必要なお金は補助金調達で良いですが、経常的費用をどのように賄うかについては、これから多くの経営者が悩まれることかと思えます。釜石市の震災伝承施設の入場料についても、将来的に大切な話だと思い、質問させていただきました。市役所からの持ち出しだけでよいのかという点は、シビアに考えていただきたいと思いました。

三陸鉄道も線路や駅舎はできるとして、その後経常的に維持していくための方策はシビアな計算をしていかなければいけないと思います。要するに事業経営にも共通しますが、一時的に必要なお金は、様々な形で調達できますが、その後の経常的費用については、みんなが考えていかないといけないと思った次第です。以上です。

○齋藤徳美委員長 齋藤です。現場でも色々申し上げましたが、ヒカリフーズさんも、ゼネラル・オイスターさんも、やはり社長本人がやる気を出せば、従来の発想とは異なる、新しい展開の可能性がある、希望は見えると、今回2社拝見して、思いを強くしました。

工夫のない水産加工は、震災に関わらず、いずれはダメになってしまいますから、新しい発想で事業展開していかなければいけない。しかし変化するためには、若い方々の感覚も必要なので、若い方々に地元に戻ってきていただかなければいけないと思います。そのためには、やはり育てるしかないと思います。今日のような事例をできるだけ多くの若者に見ていただく。また、水産加工業の方々を集め、新しいものを考えていただく場を、仕掛けを作ることが必要だと思います。

次に大槌町についてですが、まちづくりの将来ビジョンがあまり伝わらず、また、4割が戻ってくる見込みのない土地ということで、とても心配です。三陸鉄道を一つのきっかけとしてまちづくりを御提案させていただきましたが、本日の説明では、やはりイベント中心の発想で、少し残念な印象を受けました。そのため、復興局中心となって12市町村に

地域づくりと三鉄のビジョンのコンクールを行い、真剣に考えてほしいと思います。

震災から7年通い続けておりますが、たしかに箱物はでき、釜石港湾口防波堤も防潮堤も出来上がってきております。しかし、まちそのものをどのように持っていくかについては、形がまだ見えない。災害公営住宅もたくさんできるけれど、入居者がどのように生きていくかについては、描けないままではないかと思います。高齢者ももっとなりわいに関わっていけばよいと思います。しかし、そのような場もなければ、社会とのつながりもない。そうすれば生きる意欲が薄れてしまうのではないかと思います。名案はないにしても、ボランティアだけに任せておけないので、地域の様々な機関を活用しながら、何とか高齢者を社会に引っ張り出して、フォローしていく形を作っていかなければいけないと思います。

そして、気になることは、ラグビーワールドカップ等のイベントを何かのてこ入れにしたいという雰囲気がありますが、平常時の地域社会の生活をどこへ持って行きたいのかということをもっと真剣に考えていただきたいと思います。

私が個人的に感銘を受けたことは、ヒカリフーズの佐藤社長さんが金平糖の角について、非常に意見が合ったので、私が勝手に沿岸から離れて好きなことを言っているわけでもなく、現場の人と同じ気持ちで三陸ビジョンを考えているのだと思い、とても心強くしました。以上となります。本日はどうもありがとうございました。